まぎ 7 2012



生了一个



青嶺 一郎 両足を父母の家から出してゐる 喜孝

ま ^七 月



佐 藤 喜

諡

B っとかめ王岩さんは春の人

ヘモグロビンコレステロ ル梅雨に入る

原發に諡案ず夏の貝

荷を持てる生きも のはねず日からかさ

蓮 0) 露 しろがねくがねみづ か ね に

どくだみの あた り 酸素のうすうすと

逝く夏の龜 0) 甲羅 のふるびたる

> 入っていっても白い砂糖の中。 は無いと思った。私は見たことのな 白いだけの絵があった。ただの紙で の絵は忘れたがその内の一枚にただ 想像することを云へ、とのこと。他 のやうな絵をみせて気が付いた事、 教室に入ると男の人がゐた。紙芝居 びやれといふ下命。放課後呼ばれて で心理テストをしたい。数人選んで んでも心理学の学生が卒論に使ふの もふ。先生に教員室に呼ばれた。な い砂糖の山を連想した。どこまで くれとのことで私がその一人にえら 小学校の高学年の頃であったとお

でも卒論に書いたのかもしれない。 の時代、私が食べ物に飢ゑてゐると えてゐない。その学生はまだ食糧難 の先はどんな話を作り上げたのか覚 この辺までは覚えてゐるのだがこ いまその学生はだうしてゐるだら

山莊慶子

逝く春をけちらす舟のエンジン音

子供の日耳を劈くバイク音

看護士のひそひそ話五月雨

夏ぐれやバイオレットの雨コート

隣家のペンキ塗替へ夕立かな

みちのくの少女の像や夏の雲

手造りのふらここ垂れる夏の宵

+ 吉弘恭

子

睡蓮のゆるるにまかす水輪かな

水輪からしずむ睡蓮浮くすいれん

日の中に睡蓮めざむ倭のいろに

走り根を隠すおかめ羊齒の蔓延

指に来しれんげに近づくもののあり

外国語とび交ふなかの蟻の道

夏落葉他国籍語を聞きながす

の凝りもずっと続いている。れ出すのが朝の日課である。今迄足れ出すのが朝の日課である。今迄足の衰えを防ごうと一心に歩いていたの衰えを防ごうと一心に歩いていたが最近、上半身の衰えもかなりで肩

が軟らかくなってきた様に思う。う。これだけの事で少しづつ、身体目にやると確かに全身の筋肉を使目だれると確かに全身の筋肉を使いが、

邪をひいた子に薬をのませようと 長は目をみはるものがある。先日風 なっている。花もそうだが子供の成 毎日洗濯の時の心のすみの楽しみに かわからないが去年思いがけなく高 三輪咲いた。どこから飛んで来たの 理も出来ないのに先に進んでいる。 進むと小学校で教えられたが、 いる。物事は一つ終らせてから次に 国になってほしいと最近特に思って た。この子達のためにも、住みよい 成長しているのだと考えさせられ の子供の頃は………?人はどんどん なったの」とニオの子の返答。自分 したら、掌で口を隠して「お口なく いところに来てしまったのだろう。 わが家の屋上に可愛い文字摺草が いことだ。

文字摺草口も手足も雲のやう 恭子

院

赤座典子

祝ひ日に骨折をせり暮の春

白を着て子となる人のうららけし

車椅子目に焼付ける巣立つ鳥

黄金週間休まぬ看護師に支えらる

リハビリ室に沖縄言葉若葉風

帰宅時の新樹トンネル眩しかり

金環日食夏座蒲団の椅子の上に

夏めく

大日向幸江

夏めくやまだ歯の生えぬ子のバイバイ

菖蒲風呂赤い金魚の如雨露浮き

太郎次郎我慢くらべの菖蒲の湯

電線に巢立見守る親鴉

夏の川ポンポン船に人と犬

藤棚に見知らぬ人と雨宿り

夏めくや人妻に見る衿ほくろ

病院の方々は皆が素晴しいプロだっ は貴重な休暇迄使わせてしまった。 換手術を受ける事が出来た。彼女に 院へ転院出来、四月中に人工骨頭置 女の仕事が看護師で勤務先の大学病 ぐ たが、成り立てのお嫁さんの尽力 術は十日先と言われ、 に幸運であった。戻った病院では手 の様に華やかな宴に出席出来、本当 ゆる方を心配させてしまったが、 ルへ。新婦のご両親をはじめ、あら 腿骨骨折だが特例と、車椅子でホテ 付けられてしまった。救急病院で大 り、宙に浮いた身体が硬い床に叩き いと言われ続けた事故の次第であ 息子の結婚式当日の早朝であっ 以上がドラマのよう、漫画みた 一気に事態が好転した。何と彼 泊った部屋のベッドの縁を滑 覚悟をしてい 夢

でした。 分は細く切り食べる分だけ撒り 始る前にパンの耳を三羽分、 ッ」起しに来る。人間の活動時間が 早朝の五時私の寝室の近くで「カア と認定をしカラ君と名前を付けた。 こで私は、カースケ・カラ子の仔供 間に仔鴉らしい鴉が並んでいた。そ る。ある朝、 われる事もなく楽しそうにしてい らいの鴉がやって来た。追う事も追 二年目の春電線にカースケと同じく れながらも一羽で生き抜いて来た。 だ若いカースケは先住の鴉達に追わ 私に掛けて引越しの挨拶をした。ま なったのは、三年くらい前の春の事 その鴉と朝の挨拶を交わすように 一羽で電柱の天辺から声を カースケと仲良し鴉の 雀達の

ら願っている私です。 カースケー家の末長い幸せを心か

五.

薫風や絆四代澤瀉屋

薫風や若き座長の幟旗

母の日や母とは観世音菩薩

左の手添えて乾杯大ジョッキ

宵宮のなぜかさみしき祭笛

五月場所波瀾千秋楽日まで

不揃いの雹をバラ撒き夏嵐

暑 篠田純子

薄

マロニエの若葉の下で水を飲む

蘖や曲ったことは大嫌ひ

夕薄暑カレーを混ぜる魔女になる

マントルの上の地殻に住む薄暑

紫外線薄暑の中の女形

十藥の花揺らす猫濡れねずみ

貸ボート父が笑へば子が笑ふ

フランスへ行きたしと思へど フランスへ行きたしと思へど オー人楽しき背廣を着て 水色の窓によりかかりて 水色の窓によりかかりて カれー人楽しきことを思はん カれー人楽しきことを思なん

けはをゆびのうれにほのしらすらしはつなつのかぜとなりぬとみほと

と和歌が心に浮んでくる。
五月になると、うろ覚えの右の詩、 秋艸道人

どかしい。 にあらわすことの出来ない自分がも 大好きな五月、だがその心を七五

える。 た。見送られ握手した手は、 いね。」カルチャーショックを覚え 観客が競って挟んでいるようにも見 と役者はますます踊りに熱が入る。 着物の衿に挟まれた。三枚程挟まる 前に出て来て座る。 近づくと、役者は踊りの途中なのに になったりと観客を飽きさせない。 り、妖艶な年増になったり、粋な男 謡曲に合わせて可愛いい娘になった 二十五才の青年なのだが、演歌や歌 せたり。二部は舞踊ショー。 は人情物の芝居で、笑わせたり泣か どが中高年の女性ばかりだ。第一部 に行った。六十席ほぼ満員でほとん る。券が手に入ったので、息子と見 女性の観客がうれしそうに舞台に 京橋に大衆演劇のシアターがあ 息子と顔を見合わせ「すご 一万円札が役者 座長は

校庭に日のさし山吹咲きはじめ

校庭の声のあかるし濃山吹

睡蓮のすこし離れしにごり水

五月空お帰りチャイムひろがれ

'n

嗽して鴨居の古ぶ夏の朝

臼塚噴水小さき蛙の目玉かな

子に蹤かれ病院通ひ夏きたる

薄 暑 定梶じよう

花月夜影絵のきつね狸かな

冴えかへり冴えかへりつつ帆がすすむ

桜しべ降る一日を貧しくゐ

訃報また届くたんぽぽ絮飛べど

たかうなの短兵急といふ伸びやう

孟宗の竹のいま皮ぬぐところ

薄暑掲げる紙に葬儀の日取りなど

てくる。 うことに誰も違和感を感じなくなっ 変ってくる。「食べまじく」等と使 時代が変れば口語に引きよせられて そうだった。しかあし文語といえど ると説明される。確かに平安時代は してこの言葉は大概終止形に接続す めえ」なぞと「めえ」を使った。そ い」が生じ、近世江戸っ子は「知る 詞に「まじ」がある。中世には「ま 忍して頂こう。さて、古文の助動 にすることいささか気が引けるが堪 た。購入しない、立読みだけで材料 文法書が最近あいついで出版され 〈歌留多とる皆美しく負けまじく 今一度文法について。俳人の書く 中岡毅雄氏はその著で、

典文法が全ての時代を律する、

寿美子〉を、誤りと説明なさる。古ていましばらくを老いまじく 中尾

山西雅子さんは

須賀敏子

ふんはりと土に帰りぬ桜蘂

たかんなに添ふ立札や「残します」

筑波嶺やときどき雨の二輪草

今朝の晴昨日の雨や蕨食む

何時もより濃すぎてしまふ新茶かな

麦の秋字の無い絵本読み返す

夏はじめスパイ映画にのめりこむ

•‡•

竹内弘子

黒南風や帽子おさへて橋渡る

重なれば沈むばかりぞ羽抜鴨

竹皮を脱ぐやうすうす霧の湧く

報国寺ブルーグレイの今年竹

寄る波にうつらうつらと破れ昆布

プール歩行裸眼にひとのみなきれい

しもたや風の二階に上がる走り蕎麦

明るく開放的な洋風庭園がある。以前より気になる場所があった。お茶の水・水道橋それぞれのきた。お茶の水・水道橋それぞれのまた。お茶の水・水道橋それぞれのまから歩いて七分。都水道局の配水駅から歩いて七分。都水道局の配水駅から歩いて七分。都水道局の配水の上に造られた本郷給水所公苑である。それほど広くはない公苑である。

洋風庭園は手入れの行届いたバラリを堪能した。十月中旬にも見頃にのバラがこの日見事に咲き誇っていのバラがこの日見事に咲き誇っていのが、大の姿を、一様も遅かったせいか、人の姿を、一様も遅かったりとバラの代目にも見いたバラ

所でお薦めです。
隣の東京都水道歴史館も静かな場

ではいるさがられた。 今年に入って明け方、地震で目の 覚めることが多かった。幼い頃、夜 では、がする。その度に枕を抱えて祖 での布団にもぐり込んでは、姉たち が多かった。幼い頃、夜

なしのように聞いた。関東大震災の事を祖父から御伽ば

三崎坂の店の前を、両手に持てる三崎坂の店の前を、両手に持てるができると次々に御飯を炊いて「暇ができると次々に御飯を炊いて「暇ができると次々に御飯を炊いて「暇ができると次々に御飯を対いて」を対し」をするのに大童だったといか出し」をするのに大童だったといか出し」をするのに大童だったといり。

ことである。 のハモニカに感動したのはこの時の 西条八十がやはり上野の山で少年

田中藤穂

風あをし帆船かざる出窓あり

船出する友へ乾杯若葉照る

五月晴淋しくないかと尋かれけり

黒日傘地球の未来危ふさう

朝の虹さあ急がねば死支度

息吐いて柔軟体操新樹光

友のみな老いし三社の祭かな

労でない苦労を重ねているのが、 読者にとっては有難い名作も生れてい がそれぞれの生い立ちをもち、結核と だ。肉声とか肉筆とかいうのは自然に のアーカイブスをきいている。 の三十分はとても貴重な楽しみの時間 い。でも今私にとって、アーカイブス みんな故人なのだと思うととても切な で伝わってくる。そして、 るわけなのだ。誰にしても並大抵の苦 がけぬ運命との出遇いによって、私共 か戦争とかレッド・パージとか、 文子、今は六月二十五日迄は永井龍男 ても面白い。吉村昭、 な作家の生前の肉声の話がきけてと 人柄が滲みでてくる。それぞれの作家 月曜夜八時半はNHKラジオ第一 藤沢周平、 ああ、もう 思い

囀

長崎桂子

速足の女頼もし囀れり

癒しとも励ましともきく百千鳥

たんぽぽの絮トランポリン前うしろ

玉葱を三個頂く夕散歩

水鏡合唱輪唱青蛙

際立ちて薄紅の薔薇微笑めり

風来たり薔薇園騒ぐ香の坩堝

四月下旬は筍梅雨と天気予報が、 四月下旬は筍梅雨と天気予報が、 五月に入り又激しく降る日が続き、 上めば強い日差や、強い風で、其の た。どうしたらいいのだろうか、 た。どうしたらいいのだろうか、 た。どうしたらいいのだろうか、 た。どうしたらいいのだろうか、 た。どうしたらいいのだろうか、 葉もありません。

という - 日でした。 それに雨が多いからよく育つので という。庭の雜草は青青として、た が可哀想な氣もします。四·五十分 が可哀想な氣もします。四·五十分 が可哀想な氣もします。四·五十分 が可哀想な気もします。の という。庭の雑草は青青として、た

早崎泰江

外国語とびかふ花見遊覧船

通院の終りを告げし若葉かな

日食を感じぬ鴉初樟若葉

青あらしクラリネットの少女来る

歩くこと己に課せり若葉風

鱧食べて大阪のことなつかしむ

梅雨入りの予告のごとし鳩の声

蒲 森 理和

菖

朝つみの北の大地の蓬餅

切先は切先のまま菖蒲の湯

突き抜けし子らの歓声新樹光

飛行船きみどりみどりハーモニカ

水馬底なしの底金環蝕

立て札に蛍の寝床花あやめ

をさな子の怖いと震へ兜指す



でしょうか………。 ご容体は如何なされておられます

読させていただきました。「あを」五月号の一郎様の文章を拝

て感謝いたしております。ていただくほどに楽しんでいただけい

ります。 是非に開催できますように願ってお 二回目のハーモニカの会を今年も

す。とができましたら、とても幸せで「ふるさと」をハーモニカで聞くこがめたこの年にも、「赤とんぼ」や始めたこの年にも、「赤とんぼ」やがのたるの年にも、「赤とんぼ」やがった。

二力を。 出掛け下さい。ポケットにはハーモ 浅草へも行かれ、カフェ傳へもお

楽しみにしております。 かしこ



前月抄

金

箔

を

すり

 \sim

5

ゆ

兀

月

か

な

佐

藤喜

孝

み う 青 骨 父 雪 つ 嵐 <u>\f</u> 母 すら 柳 を 塔 0) に 婆 V 写 ま 路 Oと 眼 眞 み 文 は 鏡 地 仰 え 字 め Oぎ る \sim 0) Ł 7 ŧ う 0) る 誘 彼 0) す に 穀 夜 岸 猫 れ Z 雨 Oか か 0) か 夢 な な 恋 な 甃 吉 森 木村茂登子 大日向幸江 遠 Щ 弘恭 荘 慶 理 実 子 子 和

か

さっ

かさっ芽吹きの殻が落ちてくる

春 今 O日 風 0) 邪 天 遠 氖 < 曇 に り 聴 時 Z 々 ゆ 梨 子 守 O花 須賀敏 定梶じょう



な

つ

か

き

大

阪

弁

0)

花

見

せ

り

早

崎

泰

江

兀

月

馬

鹿

老

0)

吾

ど

つ

と

か

5

か

は

れ

長

崎

桂

子

お

豆

腐

は

兀

角

が

ょ

ろ

0)

月

田

中

穂

雀

降

る

復

活

祭

0)

水

溜

り

竹

内弘

子

子

さ

5

雨

堂

 \sim

L

0)

び

ゐ

吉

弘

恭

子

喜 孝

抄



21

雪柳路地へ誘ふ甃

森 理和

い洒落た句である。

「誘ふ」には登より飛石の語が適切。雪柳が

*整、といふ漢字は美しい姿をしてゐる。 惹いれるものがある。 掲句の「 登」の意とするのは「飛石」であらう。 登はいしだたみと読むことから推して一面に敷かれた状態を云ふのかもしれない。 飛石を中国語では「 踏脚石 」と表記しれない。 飛石を中国語では「 踏脚石 」と表記しれない。 飛石を中国語では「 いい姿をしてゐる。 惹かするとある。 すべて辞書の受売りである。

み仏にまみえる春の夜の夢

木村茂登子

花の雨音のみひびく堂の内

りて読んだ。こう云ふ筆者には特に助かる。句の鑑賞を助けてくれた。参籠を辞書の力を借句の鑑賞を助けてくれた。参籠を辞書の力を借

たことであらう。が引きしまる。満開の桜を常とは違ふ思ひで見が引きしまる。満開の桜を常とは違ふ思ひで見よ日常生活からお別れともなればひとりでに気みる。作者の齢を考へれば尚更である。いよい一週間の寺での生活ともなれば特別な覚悟が

信心もかういふ境地に至れば至福であらう。云ふ作者のよろこびは如何ばかりであらうか。お寺で初めて過す夜。夢で御仏にまみえたと

の音だけが聞えてくる。花の雨が静寂な空間、本静かな堂内、坐禪の時間かもしれない。雨

雨」が心に残った。 ・葉桜になってゐた。貴重な経験を七句に見事も葉桜になってゐた。貴重な経験を七句に見事

踏む仁王踏まるる邪鬼も遅日厭く 定梶 じょう

私は閉所恐怖症なのかもしれない。仁王にしても人間が同じ姿勢を千年もしてゐなければならぬと思ふと私のからだがむずむずしてくる。外をしてゐなければならない。ここまでくると勢をしてゐなければならない。ここまでくると位王も何ものかに縛られ邪鬼も同格に思へてくる。作者のつけた下五が面白い。ふたりが(?)春の暮れかねる一日に厭きたといふのである。日の永さの厭ひ方が面白い。

には暮遅しの傍題に遅日があり、うであるなとおもった。改造社版(昭和21年)

龍安寺

から始ったことに私の中ではしておく。 のだらうか。「遅日」の季語はとりあへず虚子 に使えた辞書。虚子はどんな辞書を使ってゐた た。『字源』の初版が大正十二年。虚子が十二分 項に詩経も杜審言も引用されてゐた。遠廻りし 斯う調べてきて角川の『字源』を見た。遅日の 言の渡湘江詩「遅日園林悲昔遊」)とあった。 経)といふ漢詩出身だから和歌では敬遠され 日」「暮遅し」にはあるが、 遅しなどが納る。同書の例句、 説大歳時記』になると遅日が主季語で傍題に暮 が例句の最後尾に一句あった。昭和48年の『図 『暉峻康隆の季語辞典』には(「春日遅々」(詩 ……)とある。『大辭典』(平凡社)に「杜審 この庭の遅日の石のいつまでも 「遅日」にはない。 古俳諧は「遅き

24

梅雨の蚊のほのぼの鳴いて出水の禍

た句や、 ひが伝はる。 蚊の羽音さへいとほしいむ作者のいのちへの思 は古句の風格があって好もしい。 れてゐるやうだ。この句の「ほのぼの鳴いて」 と評される。古い新しいが良し悪しの意に使は 今はしてゐない。 場に吊してゐたが、仕事場を息子に譲ったので がある。お気に入りの句である。以前は気に入っ 推敲中の自作など小短冊に書いて仕事 私の句は句会でときをり古い 出水のあとは

ほのぼのは辞書では

- ほのかに明るみが感じられるさま
- ほのかに暖かみが感じられるさま

覚には使はれないらしい。 とわかりやすく書かれてゐる。 このやうな成功句を 掲句のやうに聴 [明鏡国語辞典]

> \ \ \ 読むと、聴覚的に使ふ人が出て来るかもしれな 「あを」に一句みつけた。

寒餅搗く音ほのぼのと老夫婦 松 本 米 子

老夫婦ならではのほのぼのである。 蚊の声やほの! | 明し浅間山

残る蚊の声のほのかに伎芸天

水岡芳子

今日の天気曇り時々梨の花

るものだと思った。 ことだからである。 のはさう書かれてはゐず、詠み手が勝手に思ふ はあっと云ふ間に失敗作になる。錯覚と書いた に耀いてゐる錯覚を起す。これが〝花吹雪〟で いふよりなほ晴やかに思へ、梨の花の白さが日 ろが最後が「梨の花」。この意外な展開は晴と 天気予報士が読みあげるやうな出出し。とこ 俳句はまだまだ表現法があ

春の風邪遠くに聴こゆ子守歌 須 賀 子

書きしてみる。『暉峻康隆の季語辞典』からです。 が張られた感じがする。 から聞える(やうな)子守歌が何とも懐かしい。 「遠く」で左記の文を読んだばかりなので抜き 風邪を引くと私は周りの世界との間にバリア 私だけだらうか。

特の詩語である。 それにまた「遠き」という措辞は、 蕪村独

目に遠くおぼゆる藤の色香哉

物焚て花火に遠きかおなじかがり舟

待つ人の足音遠き落葉哉

は心理的な疎遠と不安感を現す詩語なので このように視覚的・聴覚的・距離的あるい

きがあります。 とありました。 掲句の「遠く」にもさういふ働

お豆腐は四角がよろし春の月

 \mathbb{H} 中

穂

きつける魅力がこの句にはあります。 ひ形と云ひ特別なことは云ってゐませんが、 しれない。どちらにしても四角い豆腐と円い 立った豆腐でなければとうなずいてゐるのかも 云ってゐるのかも。またはさう、かういふ角の やはり奴は四角じゃなければね。と一人ごちを 目の前にある豆腐は四角くはないのかしら、 白隠の絵のやうな取り合せである。 色と云

春惜しみ傘かしげゆく神楽坂

です。(SITARUとキーを押しても浸るには変換 屈は脇に置いて情緒纏綿な掲句に浸るのも一興 お名前と雰囲気があります。 画像かもしれません。藤穂さんはさう思はせる しませんでした。ご注意下さい) 日本画の上品な美人画を思ひます。 時には小賢しい理 しかし自

四月馬鹿老の吾どっとからかはれ 長 崎 桂 子

一郎わすればさ

ことであらう。老を逆手に楽しんでゐる作者の る。きっと作者もたのしいひとときを過ごした 囲まれ笑ひの種にされてゐる光景は和やかであ 句の表には書かれてゐない。 て笑ひの中心になったことをどう思ったのか、 さんを担いだのは若い人たちであらう。 力強い声を思ひ出してゐる。 エイプリルフールで桂子 しかし若人たちに

なつかしき大阪弁の花見せり

江

幅を拡げ力強くし、膨らみのある句になります。 してきた。 "大阪弁の花見』と捉えこの句が活き活きと 俳句は大胆に括るといふことで句

さくら雨鐘撞堂へしのびゐる 吉

子

句でよく使ふ花の雨は同じく広辞苑によると、 桜の花に降る雨 桜雨は「桜の花の咲く頃の雨」〔広辞苑〕 また桜の咲く頃に降る雨

> あめ とんど鐘楼派で鐘撞堂は少数派である。 句はなかった。鐘撞堂は鐘楼と同じ。 だ。季語として載せてゐる歳時記もあったが例 の有無は問はれないところが花の雨と違ふやう 期の国語辞典。由緒ある言葉のやう。 るをいへり」とある。「和訓栞」は江戸時代後 桜雨也、 また日本国語大辞典に「桜の花 養花の天をいう、 *和訓栞後編 桜花の時にふ 桜雨は花 の咲くこ 人はほ

めたさが忍び居ると云はせたのであらう。 したのかもしれぬ。 堂へ」といってゐるので前者。 で「忍び居る」か「偲び居る」になる。 仮名遣はどちらも「いる」になる。 ト五「しのびゐる」であらう。 「忍び入る」は 「しのびいる」と書く。掲句はしのびゐるなの さて言葉に時間を使ってきたが掲句の肝 少々お寺さんに断らぬ後ろ 鐘楼で雨宿りを

ラ 束数多 を ŋ つ

の と 大 言 鏡石 しで 大地震 で 毎 により十 る。 矢吹町まで 家屋倒 林達也氏 そう言えば矢吹に現在も大池、小池、 福島県中部 町倒壊現場 の調査でわかった。この、古代湖は郡山市から須賀川市、 の古代湖が深い眠りから目を覚ました。 広がっていた巨大な湖で、 被害が大きかったことを同県、 0) 0) 内陸に 写真が掲載された。 在ったとされる古代 柳池など残っ あの猪苗代湖の三倍以上 玉川村出身で東大大の湖「郡山湖」の内 7

細道の旅 白河から矢吹を訪れ、 この街道を通ったが芭蕉翁は 五・十一ン

に 言 葉失ふ 男 な n

を祈って止まない。 行うようだ。 会の総会など会合で黙祷を捧げて来たが、 東日本大震災以後の近隣町会は祭礼を自粛し商店会のある処は盆踊だけ 最近遠のいた感じである。 災害地の早き復興

しかし隣の若松町など穴八幡 は中止とした。 (九月) 祭礼は本祭りとして行うようだ。 わが町会

吟行できた頃がなつかしい。 さて、句会から離れて何年にもなる。参加すべきと思ってはいるが思うに任せぬ。 八十五歳現役も不幸だし運勢通りにはいかなかった。 自由に

近世俳諧と漢詩文

五十六

王岩

『引ゅ」 5.6 可味) そこ) 魚眼射浪紅なりとは、此山のゆかりを賦せるよしなり

名月や玉ある阿蘇の後より

鳳朗

俳諧を提唱する。 江戸時代後期の俳人。 鳳朗 (一七六二—一八四五)、 蒼虬、 梅室とともに天保三大家の一人。『芭蕉葉ぶね』を著して芭蕉の人格を目指す 姓は田川、 名は東源・義長。 別号は対竹・鶯竹・芭蕉楼など。熊本の人。

に由来した。 前掲の句の前書きにみえる「魚眼射浪紅」は王維「送秘書晁監還日本國(秘書晁監の日本国に還るを送る)」

積水不可極 積水、極むべからず

安知滄海東 安(いづく)んぞ知らん滄海の東

九州何處遠 九州、何(いづ)れの処か遠き

萬里若乘空 万里空に乗ずるが若し

向國惟看日 国に向かひて惟だ日を看

歸帆但信風 帰帆、但だ風を信ず

魚眼射波紅 魚眼、波を射て紅なり鰲身映天黒 鰲身、天に映じて黒く

郷樹扶桑外 郷樹、扶桑の外

主人孤島中主人、孤島の中

別離方異域 別離、方(まさ)に異域

音信若爲通 音信、若爲(いかん)して通ぜん

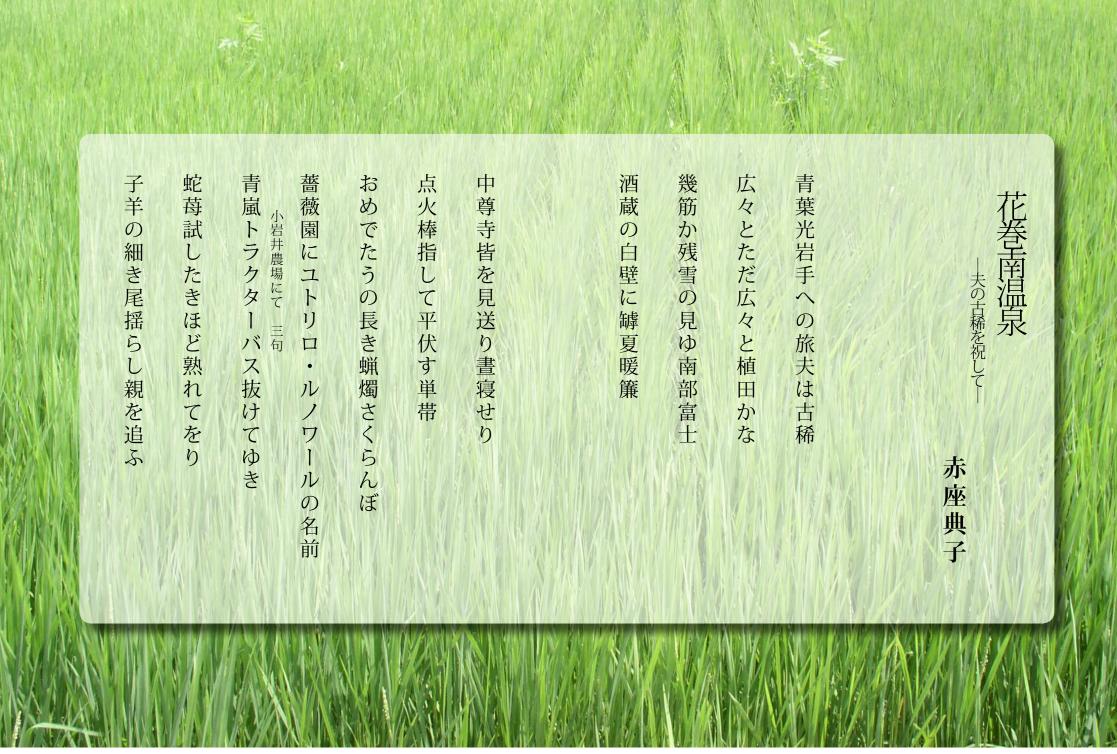
鳳朗の句は故郷の阿蘇山の背後より昇った名月を詠んだものであろう。 明治時代の正岡子規もこの詩を句題にして次の句を詠んだ。

九州何處遠、 萬里若乘空。

向國惟看日、 歸帆但信風。



29



31 30

あを創刊十周年記念句集を読む

『母瑠河』 佐藤喜孝

定梶じょう

1

旨かった記憶はある。 以後数回は行ったかと思いますが、ともかく焼鳥のは知らず俳句関係者の集る店、としてでしたろう。た頃行ったのが最初だったでしょうか。高島茂の名酒場「ぼるが」には、東京にオリンピックのあっ

ります。勿論「ぼるが」で高島茂と俳句の話を、なし、やがて高島茂の句も友人を通して知るようにないた時代でしたから、滝春一の名は知っていました当時『雲母』や『馬醉木』が書店に平積みされて

た。 ループ客が比較的多くて、それがあの頃は珍しかっんてことは臨むべくもないことでしたし、女性のグ

ただの棒ならず榛の木春待つ田 高島 茂

です。
で、私の、『あを』誌の現在につながってくるわけで、私の、『あを』誌の現在につながってくるわけた)俳歴を探ると、どうも高島茂に繋がるらしい。の句と旧かな遣い。主宰者の(と当時は理解していの句と旧かな遺い。主宰者の(と当時は理解しているが、『あを』誌の紹介記事。無季です。

いらっしゃる。やっぱり『暖流』育ちの故でしょうか。かに違う。破調句を平気で詠む私に対し、喜孝さんとがて中々難しいのですが、喜孝さんはそれをなしとげて中々難しいのですが、喜孝さんと私では明らただ、俳句の作りようは、喜孝さんと私では明ら

おにぎりのまんまんなかのお母さん 佐藤喜孝

読みに不足のあるところはご寛容頂きたく。以下『母瑠河』の緒句を鑑賞させて頂きますが

お正月くはへて歩く哺乳瓶

出てこない。 ると、 表現も俳句独特のものだ。正月は大人の分別、赤子 よちよち歩く子の哺乳瓶に焦点を当て赤ん坊は表に どの親でも見ることでしょうが、句にとりこむとな しょうか。 には関わりがない、 ていたかも。ですから季語の選定も納得できる。 の気のただようなかでなかったら、あるいは見逃し 目をもってして初めてできること。でも、神聖荘厳 赤子のする動作ですから、どの子でもすること、 誰でも、 哺乳瓶が咥えて歩く、 というわけにはいかない。見逃さぬ と鑑賞しては作者の意に反しま ととられそうな

鳥籠を買ってもらひし雀の子

氏最愛の妻になる紫の上のまだ少女の時。前以て断っておかなければなりませんが、源氏物語に私自身詳しいとか読みとおしたなどということ語に私自身詳しいとか読みとおしたなどということ語いるに過ぎないのです。で、そのシーン。のちに光源るに過ぎないのです。で、そのシーン。のちに光源るに過ぎないのです。で、そのシーン。のちに光源は、源氏物語若紫の巻に次のような場面があります。

く伏籠のうちに入れておいたのに、と。いの名だそうです)が逃がしてしまったの、せっかたえる。すずめの子を犬君(いぬきと読んで、召使用の辺りを泣いてあかくした子がその祖母にうっ

一方、掲句。子すずめは鳥籠を買ってもらった。雀の子をとらえておくために使用したものだった。だそうで、のちの世の鶏なんぞを囲ったかごの小形だるが、のちの世の鶏なんぞを囲ったかごの小形がでいると

人公なのです。 ではない、かってもらひし、なのです。雀の子が主かもみずから入るように。 鳥籠を買ってやりたる、人がつかまえておくためではなく、雀の子があた

やさしさ。

めまとひや目減りのしない鐵亞鈴

くなりそう。 景だが上五は頭で?なぞと意地悪くとってしまいた 野のかな取り合せ。もしかしたら、「鐵亞鈴」は実

確実に詩は痩せます。最後は頭で決めるべきもの。事実だけを優先するとしてすが、それならそれで大いに結構。所詮文芸は、

見逃さなかった作者の眼は確かだ。そして掲句、全て実景だということなら、それを

だから。もちろん拙句がその先端を行っていること再読三読して詩ごころの目減りする句の多い昨今

充分に弁えております。

炎天を插す傘の柄にすがりゆく

当然ながら傘をさしてゆく、と読んでいたのです当然ながら傘をさしてゆく、と読んでいたのであることに気づいて、あるいは炎天へ傘の先をつきさす意味もあるか。しかしそれなら「刺す」を造うにちがいない。ここは素直に、日傘のその柄に、あたかも縋るがごとく炎天の下をゆくことであるよ、と解いておきたい。

のように。 日除けの傘の、その曲がり柄だけが救いであるか、

晝顔や佐川急便走りぬけ

ばは適当ではないが)はびこること夥しく、国道ぎした。したがい、浜昼顔の(花に蔓延るということ私の住まう処は、もともと砂浜であった地を造成

を絵柄では句が成りたたない。 な絵柄では句が成りたたない。 な絵柄では句が成りたたない。 な絵柄では句が成ります。確かに携句を鑑賞するに平凡 は前の飛脚夫の絵の方がインパクトがあった、なん 以前の飛脚夫の絵の方がインパクトがあった、なん なんな折り宅急便の車輌が走りぬけ

頃はまだはさみ箱を担いだ旧の絵柄でした。しかし、そうでした。喜孝さんが携句を発表した

以下次是



八月吟行案内

八月二五日〈土〉

吟行地

サントリー武蔵野ビール工場

&

府中大国魂神社

「京王線分倍河原駅」11時発シャトルバス乗車 11時30より一時間見学を加希望者〈未定でも〉は七月三十一参加希望者〈未定でも〉は七月三十一

佐藤喜孝

申込先

端 荒 白 油 八 111 居 月 む 蟬 お 線むくげ 人 泣 0 が げ 端 け ふ 0 荒 を ば づ 面 歩き 111 の咲けば寄 2 な 線 影 風に 7 0 橋 ほ す むきか 0 れ つ 白 5 7 鷺 渇 は h が は 3 る 2

前 葦 燈 少 秋 ど ふ す たりでは 草 0 h 年 0 空 か 花 つ うし 沈 5 n 家 け 0 2 か 路 聞 空 直 葦 夏 ろ 之 車 0 線 D 蝶 野 0 0 0 あ t 空 か に 通 h のに 風 待 に 人 夜 る D 絮 ひ つ 0 荻 に 葦 葦 か 現 7 で のこる 入 0 0 吹 3 2 h 花 道 る 絮 3 3

あとがき

をります。じょうさんの前文に後押しされて先日「ぼるをります。じょうさんの前文に後押しされて先日「ぼるが」に『母瑠河』を届けに行った。周一さんが何年になりが、「ぼるが」は何も変っては居なかった。「ぼるが」のしかしが、「ぼるが」は何も変っては居なかった。同一さんが何年になりが、「ぼるが」は何も変っては居なかった。同一さんが何年になりが、「ぼるが」は何も変っては居なかった。同一さんが何年になりが」に『母瑠河』を採り上げて頂き感激してと尚美味しいお酒になること請合ひである。

るのであらう。 メモに残した句であるが、二十年、いやもっと立ってゐ」立春の魚里にあふとてぼるがによる

その時の編集部員の気持が分る。自分の句は可愛いので間、たり、お前の投句箋は誤字もなく読みやすいとにあるん早とちり、お前の投句箋は誤字もなく読みやすいと編えいに投句をしていたとき、編集部に褒められた。瀧春一流』に投句をしていたとき、編集部に褒められた。瀧春一造のことを振り返ってゐたらいろいろ思ひ出した。『暖

ポストへ。楽しい一月に一度の儀式が終る。と、その上から万年筆でなぞる。乾いたら消しゴムで鉛筆し、その上から万年筆でなぞる。乾いたら消しゴムで鉛筆語彙でも確認する。粗忽者なので次に鉛筆で薄く下書を語彙でられたら一大事だといふので、まず辞書で分ってゐる違へられたら一大事だといふので、まず辞書で分ってゐる

皆様はいかがしてをりますか。

(喜孝)らご安心下さい。 (喜孝)に。行間を詰めたり活字を小さくしたりで対応致しますかは会員誌、字数は目安ぐらいに思って多少の増減はご自由は会員誌、字数は目安ぐらいに思って多少の増減はご自由皆様に作品の下欄用の原稿箋を同封してますが、ここ

二〇一二年七月号

ファックス 03 6908 6038電話 090 9828 4244発行日 七月七日

郵便振替 00130-6-55526(あを発行所) 会費 一○○○円(送料共)/一年 表紙・佐藤喜孝 おいト/恩田秋夫・松村美智子

100130-6-55526 (あを発行所) 00130-6-55526 (あを発行所)